

太 棹

第百四十九號



昭和十八年十月廿三日 印刷
昭和十八年十月廿五日 發行

每月一回
廿五日發行

太棹 (第百四十九號)

風流・金ぶら・茶漬

(美地句)

去月屋

新橋二ノ八
電話二〇八

御禮

東京臨時第一陸軍病院 太棹百四九號 五十冊

東京臨時第二陸軍病院 同三十冊

寄贈者 齋藤金太郎氏

右弊社の趣旨に賛同せられ傷痍將士慰安として御寄贈を賜り候段難有奉深謝候

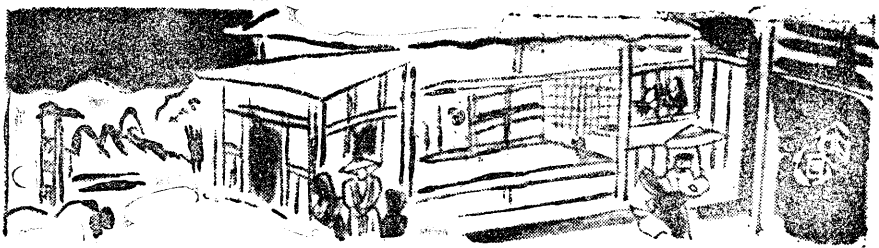
太棹社

席貨

並木俱樂部

浅草・雷門

電話浅草二二三五番



太棹 第四百九號目次

表紙・カツト……………齋藤清二郎

端場の研究(三)……………川口子太郎(二)

文樂通信……………西尾福三郎(六)

忠臣藏スハイ合戦……………伊藤紅二(八)

文樂に關する青々の俳句……………安原仙三(一〇)

「志渡寺坊太郎墳墓の探訪」……………西村游史(二)

女義短評……………内田三千三(三)

文苑……………(四)

岡田蝶花形・杉山田庭・關本邦治

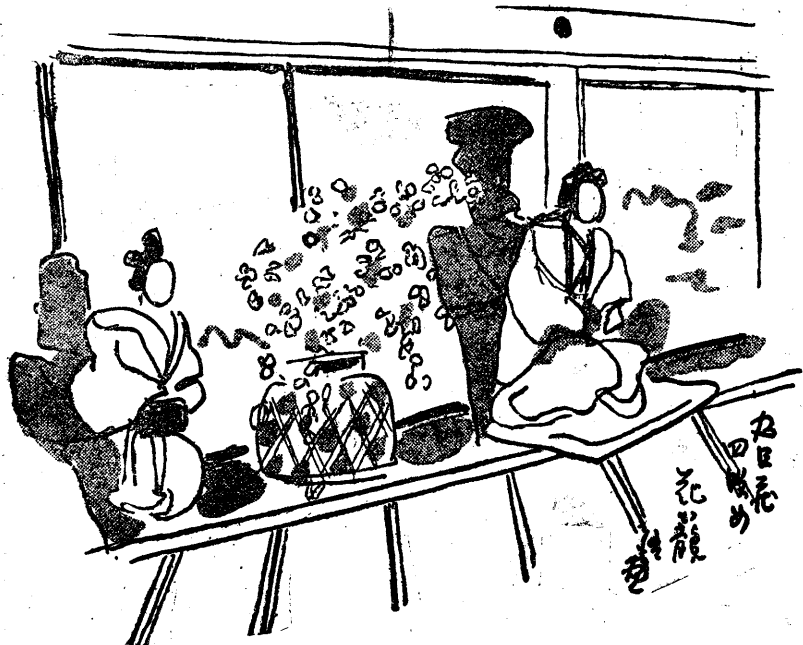
東都五十義會成績表……………(一五)

消息・會報……………(一六)

淡路行(宮内ほくろ)淨曲は天の道(傍島出雲)

三好會(森三好)……………(一九)

太棹社彙報……………(一九)



はいつも斯く稱してゐるが、義太夫の人達はむしろ「どちやう踏み」と呼ぶ方が多いかも知れない。こゝでも裏門の段は殿中の段に包括されてゐるらしい。

扱この表で注意されたいのは(二)に於て見らるゝ如く、三つ目六つ目九つ目は口、切と分かれてゐるのに、大序と五つ目は口、奥となつてゐることである。この場合切とあるべき所が奥になつてゐる段は、つまり鶴ヶ岡兜改めと山崎街道二つ玉の比較的軽い語り場(尤も原則としての忠臣蔵大序は決して軽くないが、後世に於ては大序の意義は殆んど喪失されてゐる)であるから、切の太夫と口の太夫とが、顔付けがあまり違はぬことを示してゐる。さういふ時に、切を奥と書くことがあるのである。が更に、もう一つは、切と稱するのは必ず序切、二段目の切、四段目の切に限るのであつて、これ以外は切と云はずに奥と云ふ。立端場の最後の語り場が奥であるといふことがわかる。

かういふ説明になつてくると、「忠臣蔵」はあまり適當な例ではなくなつて来る。何となれば「菅原」や「千本櫻」のやうに一曲が全五段に構成されてゐると、各段の切がはつきりするが、相憎く「忠臣蔵」は十二冊に書かれてゐるので、曖昧になり勝ちだ。

勿論十二冊でも其實質は五段が基礎で、各段に依て其語り口の風が一定してゐることは何等異なるところは無いのであるが、こゝに一層説明をはつきりさせる爲には十二冊物を一

應五段物に還元して見なくてはならない。迂遠なやうだが、敢へてそれを示すと、まづ鶴ヶ岡から桃井館までが五段物の大序に相當する。三つ目の殿中双場が序切で裏門は落合、従つて四つ目の扇ヶ谷の段が二段目の語り場である。五つ目の二つ玉の段が立端場で、六つ目の勘平住家が普通の場合の三段目に當るわけで、一方の掛合と道行を經由して、九つ目の山科閑居の段が四段目に相當する。かくて十段目の天河屋義平の件が五段目である。この分け方に還元して、もう一度前表を吟味されるならば、切と奥の使ひわけが大ぶはつきりして來られると思ふ。

なほ以上述べた他に、口、切を中、切と書くと、口の太夫が大きくなり、切の太夫の顔が下がるといふ方法もある。山科の段の口を中と書いて、相當な腕のある太夫が「雪こかし」の端場をつとめた實例などこれである。前表に就いて、もう一つ注意されべき事は、四つ目の扇ヶ谷の段が、いきなり切で始まり、跡として城渡しが附いてゐるか、又は切とも何とも書かず一人の太夫が語つて城渡しが跡といふ一字で加へられてゐる事で、これは四つ目の扇谷には初めの端場が無く後に城渡しの落合だけのある事を示してゐる。但し、この城渡しといふのは、現在文樂でやる如き、淨瑠璃と云へば「はつたと尻んで」のたつた七文字きりで、あとは凡て由良之助の入形のみ無言の仕草に終始する——義太夫ヌキの人形のいかに間の抜けたものなるかを如實に示す見本の如き——あの

霞ヶ關の段といふ不思議なものでは無く、九太夫等の評定や館の庭や襖に對する諸士の訣別の情を描いた有名な「御先祖代々我々も代々晝夜つめたる館のうち」と云ふくだりである。然し、御承知の如く四つ目のはじめの方には、上使の入り込みの前に花籠といふ場面がある。芝居では花献上と稱するさうだが減多に演らないけれども、文樂では重要な語り場として、現在では相當な敏腕の太夫が一人でこの僅かな紙數枚ほどの語り場を受け持ち、「郷右衛門、力彌も共に御主君の御憤りを察し入り、心外」といふオクリで、鹽谷の家中が悲憤の涙にかきくれてゐるところ迄を語るのが普通である。そして切の太夫は舞臺も替つて判官切腹の段といふことになるから、形式上、花籠は近來確かに端場の體裁をとつてゐる。然し、「浮世なれ」といふ淋しい二段目のオクリで出ることの語り場は本来端場では無い。だが凶事の雲のかぶさつた扇ヶ谷鹽谷館の陰々たる廣間に、美しき花籠に盛りられた「鎌倉山の八重九重いろいろ櫻」のみ徒らに咲きみだれ、人々の憂愁の眉は更に深く打ち沈む一種異様な雰圍氣の漂ひ迷ふ、この花籠の段といふ變つた語り場に就ては、次回に於て些かふれてみたいと思つてゐる。(つゞく)



文 樂 通 信

西尾福三郎

久しぶりの本格興行だと云ふのに織太夫道八と云ふ顔ぶれが抜け、玉藏もまだ出場せず、その上狂言に迫力が乏しく、何ちらかと云へば氣乗薄である。

晝の部に通し狂言として太功記の配膳より妙心寺までを出してゐる。本能寺から阿能局注進、清水長左衛門切腹、妙心寺と並べた所は繪本の飛び讀みと云つた感じである。中で珍らしく、しかも面白いのは蛙が鼻の條りである。呂太夫と仙米の擔當日だつたが、この兩人では一寸迫力不足である。人形では政龜の安國寺惠慶に比して光造の清水長左衛門は力量足りず、人形陣の手不足を痛感させる。妙心寺の口を語つた越名太夫と勝太郎の組合せに希望を持つ。何れも熱心さを充分に感じさせた。徒らに若手の松太夫一人に功名をせず、追々これに續く新人が續出してほしい。その意味で特に激勵の辭を贈つておく。

奥は大隅と清八の受持である。追がに歴卷の出來で久しぶりで大隅健在なりの感を抱かせた。詩趣の含みが足りぬとの夜の部分では古靱の饅頭娘だけが問題である。こゝ半年程の間に、沼津、岡崎と共にこの人は伊賀越の高峯三つを物の見事に征服して堂々第一人者の貫祿を見せてくれた。沼津から岡崎、それから郡山では妙な道順であり、物語の順序としても逆コースだが、ともかくも伊賀越研究と云ふ主題から云つて斯道の愛好者にはよき福音であつた事に異論はない。前二者に比すれば郡山は敢てこの人の力量を煩はすには作品の方が負けてゐる形である。政右衛門の格幅だけが馬鹿に大きく感じられる許りで、他にこれに打つかる強い人物がないだけにこの場はさ程苦吟も感じられず、苦吟と云へば榮三はあの老體で、こゝの政右衛門と次の場の槍試合と、そして新作の巴御前に出て奮闘してゐるが、文五郎はお谷一役で隠居してゐる。この老大家を煩はす事かくの如きは一寸氣の毒である人形の危機はいよいよ足下に迫つたかの感あるを否み得ない切りに南部と伊達代り合ひの酒屋がある。一方だけしかきいてゐないのでこれを同架に論ずるのは遠慮しておく。

本稿執筆前にもう一度初めより觀直した上で改めて詳しい印象記をかくつもりでゐたところ身邊多忙に取紛れてその暇なく十數日前に匆々として立見したまゝの覺束ない印象記をもつて儘かに責を塞いでおく次第である。一つには狂言に對する魅力の無い事も原因である事を附加へておく。十月の低調に比して、十一月は晝の部に盛衰記の通し、夜の部に鬼界ヶ島と一寸食指の動くものが並んでゐるので今から期待される

某新聞評であつたが、これは絃の清八が分ち持つべき責任でこの人の絃はとかく情緒が乏しいは遺憾である。この場が大隅が持つて行つてしまふと、追がに次の十段目は古靱でなければ他に受持つ人が一寸見當らない。よつて、もつて妙心寺まで一應きつてしまつた理由も分ると云ふもの。成程繪本太功記と稱するだけに、各場面に盛られた繪面本位の色彩感に拘すべき味があり、五場面を通覽してそれ〴〵舞臺面の變化の味に捨て難きものがあり、妙心寺が逆勝手にならざるを得ない理由もかう見てくると成程と首肯される。

次に西亭の新作晴着の子寶があり、相生吉五郎で小味に一應の成功は示してゐるが、例によつて西亭氏の新作は夜の再演出陣と共に文章が出來て居ないので浪花節の域を出てゐない。晴着の子寶と云ふ題名からして何の事だか分らない。安藤氏だつたが東京新聞の紙上でこの人の文章を難じて居られたのを拜見したが、淨瑠璃の根本たる章句が法に叶はなくては所詮根の無い仇し草である事を三思すべきである。

謹 告

向寒の砌各位愈々御清祥の段奉賀候陳者小生久しく斯界に於ける諸彦の御風交を辱ふし居り候處今回重大時局に鑑み平和克服迄素玄共に交誼を遠慮仕り度此段太棹誌上を以て謹告致し候

近江清華

各 位



忠臣藏スパイ合戦(三)

伊藤 紅 二

少しく文章は前後するが、九太夫の出をあとまはしにして、

「あたり見廻し由良之助……」と云ふ其の文句が既に防諜にピッタリとする。丁度、合言葉の様な所をとりあげる。

「あたり見廻し」
だけでは何の變哲もなく、何處へでも通用のなる言葉だが、其の下へもつて來て

「由良之助」
とつけると之がそっくり防諜用語になるから不思議である。

殊に「一力揚屋の段」と銘うてばもううごかしならぬ防諜の名文句、名標

即ち

「お輕は上より見おろせど、夜目速目なり、字性もおぼろ、思ひついたる延かのみ

でそろ／＼面白くなつて來る。スパイ合戦のうちでもいと艶なる舞臺技巧のいる所、殊に

「……出してうつして讀みとる文章で今度こそは本當に節調の上で氣分をかへて

「下よりは九太夫が

は全くいきもつがせぬ所で間諜合戦の最高調であるが、然し考へてみればお輕は勘平の女房でも、今は祇園の遊女それと對照の位置に本當にイヌにも等しい斧九太夫なのだから、手紙を持つた由良之助も迷はざるを得ないことになる。

「月かげにすかして讀むとは神ならす全く知るよしもない由良之助である。

繪にみる様な舞臺面でお輕のいともあでなる姿態に對して椽の下では、かけた老眼鏡もグロ味たつぷりな九太夫

語。

まことによい當節用の通り言葉になるから、これはこのまゝ當分の間、何處へでも何時でも盛に使つてさしつかへなし。

この心がけさへあればスパイ御用心のこの節にはもつて來いである。

扱て舞臺へもどつて、由良之助は今までの醉眼朦朧、醉步蹣跚、醉態無慘なていたらからガラリ態度一變、からだのこなしよろしく、キリッとした様子にかはる一くぎりは七段目中的見所もあるが、然しそれは何處までも心持ちのことであつて、うはべはやはり酔どれ風情、それでゐてあたりに

の點綴は實にえも云へぬ對照の妙、こころあたりに歌舞伎の醒醐味も味ははれるし、又淨瑠璃のすてがたい味もあらと云ふものだ。

由良之助は本當には知るや知らずや文章には「神ならず」とあるから、あれほどの遠慮深謀の一味の棟領もこの時ばかりは油断したと見るよりも、御

氣をくばりつゝ、所謂「あたり見廻し由良之助」なのである。

「釣り燈籠の明りを照し、讀む長文は御臺より、敵の様子こま／＼と女の文のあとや先き、の名調子でデン黨をうならせる所でもある。

「まわらせそろで抄どらす

はさもありなん、全く息もつかずに語れる所でもあり、又きける所でもある

ここで太棹はガラリ氣分轉換、

「餘所の戀よとらやましくは、場面も氣持ちも、主格もかはつてお輕のことになるのも淨瑠璃文學の妙であり、融通無碍な書き方は又、語り口へもあらはれるはづである。

本當に「よその戀よとらやまれ」たか否かは當人のお輕に聞かねば分らぬが、然し、それ等はスパイ合戦には大した因縁もなし。

ただ、其の次の文句から、之は問題である。

主筋の御臺様から、それも、せがれ力彌を直々に使者としてよこした文箱であつてこれが待つ間おそしの氣持で、たちどころによみつくりたいのが劇の大根であり、義太夫の人情味であらうと解釋するのが本筋である。

とにかく由良之助うかつの功名と云ふ所だ。

湯河原に齋藤山生氏を訪ふ

岡田 蝶 花 形

霜月や診療所なる看護婦を三人連れて湯河原の旅 (十一月七日)

停車場を出づれば己に柿の實の赤きに心ひかる湯河原

みかん山に蜜柑求むる一行に別れて行ける南湯河原

小學の筒井筒友の齋藤の別荘あかるし紅葉する庭

汁粉饗應あかるき二階色紙帖の大觀閣雪豪華うれしも

清方の明治美人の髪かたぢいと艶やかにめでたかりける

齋藤の別荘前を十國の峠がへりの人ら續ける

君が家は蜜柑のみのる山との紅葉も見えていで湯湧くてふ

文樂に關する青々の俳句 (二)

安原仙三

文樂座にて源平布引瀧を見る
松並校琵琶を彈す

霜に泣く猿糸が糸に泣にけり

(註 猿糸は四代目にして今の友次郎也)

おしゆん傳兵衛堀河の段 (六句)

秋風や人戀に猿の生別れ

編笠につゝめば顔のうそ寒き

行灯と兄と妹の長夜かな

傳兵衛の赤き襦袢や夜半の秋

朝顔やししばし浮世をかり蒲團

淋しさは薄に似たる夫婦かな

與次郎の母

猿の子の哀れを泣くや老の秋

文樂座見物忠兵衛封印切の前

ふところに氷を小紋羽織かな

文樂座見物 (三句) 新口村

紙の雪薄尾花はなけれども

父を父と言ひ得ぬ雪の夫婦かな

梅川

こよりして足駄の雪に泣かれけり

頭巾きせて梅川見けり雪の日に

梅川の人形ぬくめん春火桶

文樂座大文字屋の場

こほろぎの霜夜の親子三人かな

「志渡寺」坊太郎墳墓の探訪

西村游史

花上野譽石碑第四段目志渡寺に「此稚子の敵討首尾能く仇を討し後、其名は空仁大經と道得未世に咲匂ふ花の上野の片邊り古蹟を残す石碑の譽は今に芳し」とありて丸本の最後には「首尾能く敵討つ上は兼ての望、出家得道身の成る果は東なる花の上野に名も高き觀成院の法の庭、墳墓も今に隠れなき古今に稀なる仇討は金山彦の恩頼(みたまのふゆ)天皇の御稜威) 治る御代の民生の御威を惶み奉る」とある。

上野の觀成院に空仁大徳の碑があるところから此寺を探したが今は此名の寺は見當らない、又日本音曲全集義太夫全集には「今は天王寺墓地に在る以前は上野櫻木町青龍院にあつた」と尙ほ玉井盛文堂編輯の志渡寺には「今は

谷中天王寺墓畔にある」と何れも誤つて居る事を發見したのである。即ち私には天王寺へ行つて古文書を調べ墓碑も探したが天王寺では何等手掛りもなかつたから或は青龍院でないかと思ひ寺町を探り探つて青龍院を探し當て門内に遣入ると右側に高さ二尺四五寸幅七八寸の小さい石碑に「空仁大徳」と彫つて新しい香花が供へてあつた。掃除も行届き香花は絶えない様に見受け吾れ又合掌、その寺で何か記録でもあるかと尋ねたが何も無い。又碑の周囲を見ても建立の年月日も無い。私は墓碑はモット大きいものと想像して居たが餘り小さいのが意外であつた。惟ふに坊太郎は觀成院で自双したとも病死したともいふから或は青龍院が元は觀成院

であつたかも知れず天王寺へ移轉したといふが天王寺では之が記録もない。或は初めから現在の場所にあつたのではないか、或は此碑は後の世に建立したものでないか、その邊は判然しない志渡寺を語る人や俳優など出演の方々には是非共參詣せられん事を望む。一番近道は上野驛東武電車動物園前下車青龍院と尋ねれば直ぐ分る。

坊太郎は史實に依ると小太郎である其他劇と史實とを比較して重なるものを拾つて見ると次の通りである。

劇(花上野譽石碑)

史實

讚岐國丸龜殿 讚岐丸龜生駒家

主人貫之助廉 奥方の名を取つて生駒家としたもの

中生駒の方 田宮源八郎

民谷源八 田宮源八郎

民谷坊太郎 田宮小太郎

森口源太左衛門 堀源太左衛門

無禮討三月十八日 寛永元年八月十日

青柳左島 柳生飛騨守

三歳の時父の横死 父の横死の時誕生

消息 會報

淡路行

宮内はくろ

鋒滴凝結して出來た夢の國淡路島、詩の國繪の國であり又淨瑠璃人形の國でもある淡路島は、稔りも豊かな稻穂をわけて小さな汽車が玩具の様に走つてゐる。これに乗つて洲本から約一時間所謂淡路人形發祥の地である市村へ着く。

市村三座の隨一市村六ノ丞座のたのみに應じ左記の吾等一行は四日に涉り市村劇場に於て出征遺家族の慰問を兼ねて公演したのであつた。

(十月八日)赤垣(長玉、千代登)堀川(東華、千代登)寺子屋(ほくろ、團市)志渡寺(錦、團市)壺坂(操、松十郎)御

し」「自分の爲めには汗を流す」三流主義を重點として、親切、寛大、勤勉勇氣、強固な人倫五道を太棹誌の機關を辿り、終局の勝利と幸福とを達成致したく、茲にその感想を陳べて同志相携へて行きたいと思ひます。

三好會

森 三好

毎年春秋の靖國神社御祭典に際し新たに合祀される爲上京の御遺族に對し其慰安と舊交を新たにする目的を以て歓迎會を催し來りしが、今秋も又十月十三日小石川金萬料亭に於て歓迎會を催し其慰安餘興として本下巴好、太三好、酒屋知晟、三味線民造及び三好にて義太夫を開催、久し振りに故郷岐阜縣菅田町の御遺族を悦ばせた。三好は本宅見廻りの爲め十一月一日岐阜驛着同市の雅友を訪問し、再び岐阜發同日夕刻菅田町實家へ到着の上一二日休養、下呂萩原兩町の因會義太夫會幹部に面會し久し振りに打ち合せ會を催す

殿(千晴、團市)：(九日)城木屋(東華、千代登)朝顔(芦鶴、土佐廣)新口(錦、團市)鯨屋(義昌、綱助)陣屋(ほくろ、團市)太十(千晴、團市)沼津(操、松十郎)：(十日)山名屋(芦鶴、土佐廣)日吉(美松、綱助)忠六(ほくろ、團市)合邦(錦、團市)酒屋(千晴、團市)野崎(操、松十郎)安達(義昌、綱助)：(十一日)長局(操、松十郎)陣屋(錦、團市)太十前(芦鶴、土佐廣)奥(美松、綱助)佐太村(ほくろ、團市)寺子屋(千晴、團市)辨慶(義昌、綱助)岡崎(土佐廣、綱助)忠七(總掛合、綱助)

栃木より

館野天籟

秋冷の砌貴社益々御隆昌の段奉賀候陳者十月十七日當市に於て北關東素義名人大會を開催し、茨城群馬栃木の一流所參集左の順序にて盛會を極め申候合邦(群馬、東昇、才造)本下(栃木、龍玉、稻子)寺子屋(群馬、一稻、才造)先代(茨木、鶴聲、福松)毛谷村(栃木、

善なり。尙都合に依れば同縣加茂郡佐見村の古友と逢ひ昔し馴染の想ひ出を新たにし十一月十日頃歸京の豫定なり

○岡崎圓六氏 九段下廻橋々畔にて永年關西料理「圓六」を經營してゐた岡崎圓六氏は今度貸席に轉向し、淨曲界の諸賢には特に便宜を計るとの事である。電話九段四〇〇六番。

○竹本長尾太夫師 文樂座竹本長尾太夫師は歌舞伎本床専門に轉向、長命にて永く出演するやうにとて松竹社長白井松次郎氏より竹本千歳太夫と命名する。

○素玄淨曲鍊成會 淨曲研究會は今回警視廳に企劃届を提出し毎月の鍊成會開催の許可を得た。十月例會は神樂坂「千鳥」にて十日午後一時より野崎(悟堂、三平)堀川(竹史、猿之助、ツシ、松四郎)岸姫(小團司、猿幸)の番組にて開催。十一月は十四日同所にて午後一時より開催。岸姫(素鳳、吉和)橋本(操、米翁)國性爺(近衛太夫、松

天籟(福松)

淨曲は天の道

傍鳥出雲

吾人が好な義太夫を語ることは健康娛樂でもあるが、亦た之を聞くものゝ娛樂である、則ち共樂することは論を待たずと思ふ、斯の道は實に我が國の忠孝を歩む大道にして、其精神が宇内の正義となり、光輝ある國體の大精華となる、故に微動たもせぬ大和魂の基礎たる源と信ず、然らば能く試練を積み、天地に正義の建設を導く料とせば、更に進んで發展の普及を圖りたいと思ふ、しかして凡ゆる機會に一般民族の龜鑑として、冷ねく強く叫ばれ、健康資質の向上として、國家の最も重要な要請であると存じます。冀くば當局よりも、歴史獎勵の爲め、協賛して之れが理解を一層に深らしめたいと欲するものである。所謂の天理人道を語る、好義者各位と俱に「國の爲めには血を流し」「人の爲めには涙を流

四郎

○義友會 飛石かなめ、葛和都玉、齋藤正鳳、藤本喜鳳の四氏に依り組織された義友會は高光吳光氏も加入して第三回を十一月交正俱樂部に開催する事になつた。

○大阪「倭會」 大阪に於ける素義審査會として古き傳統を誇る淨曲倭會は竹本重太夫、豊澤廣助、豊澤新造、武田眞若四氏審査の下に第十二回秋季大會を十月廿四日より三日間毎夕新聞社後援北新地演舞場にて開催。同會は秋聲會浪花大會と稱し明治年間より發企せし大阪素義團體が改稱繼續せるものにて、今回西村紫紅氏が會の爲め盡瘁の勞を取る事になつた。東京よりは鈴木美松、杉本花房の兩氏が出演。審査の結果は本號編輯締切まで間に合はず、次號に發表。

○大日本素人淨瑠璃會 大阪大日本素人淨瑠璃會は理事會協議の結果、重大時局に鑑み、戦局の見透しと、開

會延期中に要路の接渉を行ひ妥當的
領の組織等に充分の計畫を確立する迄
十六回より一時延期する事になつた。

○鸚鵡會 前號記載の通り鸚鵡

會は十月三、四の兩日大東亞會館にて
第五回を開催し、會員の熱心と力演は
益々會を堅實ならしめ頗る好評を博し
たが、當日は會場外の休憩室に近松門
左衛門の筆に成る「瓢」の茶掛並びに極
彩色にゑがきし女淨瑠璃元祖六字南無
右衛門の象像を飾り、傍らに「文祿年
間三百五十年前全盛の女太夫なり、小
仙の爲めに記す」といふ本會の名づけ
親鶴澤友次郎の添書があり、此の會に
應しくも又奥床しかつた。

○女義若女會 東橋亭を會場とする

同會は第七十八回を十月十五日開催。
日吉(小素、素子)寺子屋 素次、清三
柳(素廣、巴住)合邦(東朝、仙玉)太十
(素八、素一)第七十九回十一月一
日(鈴ヶ森)駒榮、素子)日吉(素次、清
三)壺坂(素廣、巴住)十種香(住若、清
一)合邦(素八、勝八)

○義太夫特選會 義太夫鍊成道場
を去月駕籠町壽々本で催はした邦樂協
會事業部はその第二回として義太夫特
選會を十月十六、十七の兩日正午より
開催。又助、鈴ヶ森(都喜太夫、糸一
郎)日吉、組打(浪江太夫、猿若)酒屋
先代(都太夫、新造)忠四、帶屋(櫻太
夫、辰六)壺坂、寺子屋(浪花太夫、
猿平)

○豊竹猿春公演 第九回公演を十月
廿二日午後五時より蠶糸會館にて催は
す宿屋(駒龍、駒照)妻八(素昇、猿玉)
酒屋(小津賀、紋致)忠四(猿春、三生)
千兩職(おとわ、駒若。猪名川、猿春、
鐵ヶ嶺、素昇。呼出、駒龍。絃、猿幸
胡弓、松四郎)

○小土佐を聴く會 古考藝術家と
して曩きに竹本小土佐を招待して「小
土佐を聴く會」を催はした岡田蝶花形
氏は齋藤金太郎、岸竹史、中川愛氷、
外十餘名の文士名士を發企人として再
び十一月十日午後四時より五反田松泉
閣で開催したが、子息を失ひて以來久

太棹社彙報

◎本欄は大會又は新生の會を報道致します。
◎開催前月に詳報したものは開催後の記事を略し
ます。

◎持種の催はしの外、前書を略します。

◎番組御送附なきもの、或は通信なきものは記載
洩れとなります、御諒承を乞ふ。(掲載順不同)

◎なほ見出しに二號活字を使用、特別掲載方御希
望の會は其旨御一報を乞ふ。

太棹社

第卅九回 東都五十義會

東都五十義會は前號所報の通り十月廿日より四日間日本橋
俱樂部に於て第卅九回秋季大會を開催し、竹本住太夫氏缺席
の外、長谷川文久、吉田三芳、高瀬操、安藤光榮、野澤吉彌、
豊澤團友の六氏に依り審査の結果は別掲の如く、外に同會從
前の大關及び理事が例に依り毎日番外として無審査にて語り
大切には左記掛合が添えられた。

(廿日)沼津(乃菊、新造)千兩職(鐵ヶ嶺、猪名川、春和。
おとわ、操。呼出し、大阪屋、千晴)絃(扇之助)。(廿一日)
忠四(壽瓢、新造)引窓、乃菊、綾之助)布四(行綱、春和。平
次、呑笑。又五郎、あるを。藤作、花房、小櫻、其柳。官女
乃菊)絃(絃平)。(廿二日) 御殿(鳴門、扇之助)菅四(がん昇
猿之助)忠四(うつろ、絃平)佐太村(梅王、鳴門。櫻丸、うつ

しく東京の舞臺に立たなかつた竹本東
朝も今回は賛助出演をした。陣屋(東
朝、三平)新口(小土佐、美佐尾)

○平安素人淨曲會 京都平安素人淨
瑠璃會は竹本佳太夫、豊澤團友、澤田
金聲三氏審査の下に十一月廿六日より
三日間先斗町歌舞練場に於て開催。

○新京「日の丸會」 新都市竹本喜美
太夫連「日の丸會」は十月三十日午後
七時より春明街土橋氏宅にて開催。酒
屋(喜鶴)先代(喜昇)太十(喜鶴)忠四
(喜鳳)壺坂(喜喬)絃(喜美太夫)

次號會報至急お願ひ
致します

不。八重、花房。白太夫、桔梗)絃(猿三郎)。(廿三日)十
種香(其柳、扇之助)鮎屋(隅斗、綱助)忠九(關路、猿之助)岡
崎(桔梗、綱助)沼津(平作、桔梗。お米、操。十兵衛、春和、
孫八、關路。安兵衛、隅斗)絃(猿之助、ツレ、松四郎)
四日目に會長細川清氏が簡單に挨拶を兼ね閉會の辭を述べ
それより表彰式に移り萬歳三唱の後採點を發表して芽出度第
卅九回を終了した。

淨曲協會の傷痍勇士慰問

大日本淨曲協會は人形淨瑠璃實演を以て各地傷痍軍人療養
所にて勇士の慰問に努め十月六日は千葉縣國府臺千葉療養所
にて白石(義昇、巴住)寺子屋(山生、鹿重)出演にて好評を博し
たが、同廿日は神奈川療養所に於て左記番組に依り午後一時
より開催した。同協會へは「義太夫が今までこんなに面白い
ものとは思はなかつた。」といふ感謝のハガキが各方面から
續々舞ひ込むとの事で、傷痍勇士の慰問と同時に淨曲の普及
ともなり、協會の事業として頗る意義大なるものである。

酒屋(綾作、駒登久)長局より奥庭迄前(山生、奥(佳世子)絃
(綾之助)半兵衛、お初(金之丞)母(金三郎)お園(金吾)宗岸
(金彌)半七(金昇)三勝(金枝)尾上、岩藤(國之丞)

なほ十一月廿二日午後五時より日比谷公會堂に於て日本精
神作興の會を催はし、素女、綾之助、素昇、染登、清一、猿

玉、猿幸、佳仙、素次、佳世子、清二、清三、駒照、巴住、住若、素八等帝都一流女義を以て壺坂、先代、太十、鯨屋を上演して東金の丞外國演會人形部總出演にて、日本精神を昂揚、米英撃滅の大覺悟を奮起せしめる事になつた。

葛和都玉氏の入賞記念

竹本都大夫連の葛和都玉氏は第卅九回東都五十義會に於て沼津を上演し、五、三四の昇點をもつて二等に入賞したので、これが記念祝賀の會を十一月三日午後一時より神樂坂、千鳥にて開催し、聴衆は廊下にまで溢れる盛況を極めたが、聴客にはお祝ひとして豆債券を呈し五時終演後神田「花家」へ當日の出演者並びに關係者多數を招待して盛宴を張り、席上都玉氏の挨拶に次いで星野桔梗、飛石かなめ、石田組社長石田充親氏等交々祝辭を述べ和氣霽々裡に八時半散會した。當日の番組は左の通り。

先代(都仙)酒屋(都樂)白石(都竹)八陣(かなめ)戀十(東好)妙心寺(正鳳)忠六(都平)安達(喜鳳)沼津(都玉)太十(都昇)寺子屋(桔梗)絃(都大夫、道之助、綱助、和歌吉、猿清)

因會男子部秋季大會

日本義太夫因會男子部は左記番組の下に十月廿四日十二時

助。維盛、東朝。内侍、六代君、播昇。梶原、彌昭。村役人綾作(絃前、猿幸、奥、猿玉)(四)忠七(由良之助、素昇、重太郎、若好。喜太八、佳世子。彌五郎、駒榮。おかる、彌周力彌、重枝。伴内、小津賀。九大夫、住若。平右衛門、駒若)絃(前、紋致。奥、三生)

竹本旭勝引退披露

永年大連にあつて斯道に貢獻せし竹本旭勝師は高齢に依り今回引退する事になり、同師を師と仰ぎ日頃鍊磨精進してゐた旭勝會連は關東州邦樂舞踏協會、團丸會、廣治會の後援の下に十月廿九日より三日間同市浪速座に於て左記番組に依り盛大な引退披露會を催した。

(初日)朝顔(旭秀)先代(松調)組打(奴)太十(西海)柳(旭登)紙屋(表具)寺子屋(壽)：挨拶：堀川(母、みどり。おつる、表具。お俊、三幸。傳兵衛、白水。與次郎、あさひ。旭勝。ツレ、旭晴、旭秀)：(二日目)十種香(旭秀)太十(うろこ)新口(樂系)壺坂(榮枝)勘作(湖東)先代(扇松)鯨屋(萬華)：挨拶：寺子屋(源藏、あさひ、戸浪、表具。小太郎、旭秀。玄蕃、翠香。百姓、みどり。千代、三幸。松王、白水。旭勝)：(三日目)忠臣藏三段目(勝太夫)裏門(勘平、加津枝。お輕、旭秀。伴内、旭晴)四段目(判官、白水。顔世、三幸。九大夫、津玉。郷右衛門、榮枝。諸士、萬華。石堂、みどり。藥師寺

より淺草並木俱樂部に於て秋季大會を開催した。

(第一部。十二時開演)本下(若狹之助、浪花太夫。本藏、路太夫。伴左衛門、三千歲姫、卯太夫。良造)鈴ヶ森(朝見太夫、芳太郎)聚樂町(都太夫、新造)油屋(稻太夫、辰六)引窓路太夫、絃平)紙屋(卯太夫、和孝)陣屋(巴太夫、猿喜知)：(第二部。午後四時半開演)太十(浪花太夫、猿平)酒屋(紅葉太夫、猿三郎)阿古屋(津彌太夫、扇之助)佐々木隱家(殿母太夫、勝助)新口(近衛太夫、松四郎)逆櫓(駒登太夫、扇之助)十種香(八重垣姫、都太夫、勝頼、朝見太夫。濡衣、近衛太夫。謙信、駒登太夫。白須賀、原、卯太夫。猿之助)

因會女子部秋季鍊成大會

日本義太夫因會女子部は會員總出演の幇合を以て十一月十六日午後五時より日本橋俱樂部に於て秋季鍊成大會を開催。番組左の通り。

(一)千本櫻道行(靜、越駒。忠信、若好。ツレ、彌周、小津賀、駒龍、綾龍、綾清、重之助、住若)絃(清一。ツレ、清二、清三、清壽、駒登久、駒照、小政、巴住)(二)寺子屋(源藏、猿春。戸浪、素次。松王、素八。千代、駒龍。御臺津多慧。玄蕃、佳仙。よたれくり、素女。百姓、東朝、若好素昇、小津賀、重之助)絃前、勝八。奥、仙玉)(三)鯨屋(權太、染登。彌左衛門、綾之助。母、小團司。お里、重之

翠香。力彌、松調。由良之助、あさひ)六段目(勘平、みどり、母、翠香、狩人、あさひ。彌五郎、湖東。郷右衛門、萬華)挨拶：七段目(由良之助、あさひ。力彌、うろこ。九大夫、三幸。伴内、表具。亭主、萬華。お輕、橘、仲居、旭晴、旭秀、旭登。重太郎、白水。彌五郎、榮枝。喜多八、津玉。平右衛門、翠香。旭勝)三日間絃(團丸、廣治、旭晴、旭勝)

調査 三審社

理事長 笠原善三

(東都五十義會常任書記)
事務所 東京都澁谷區並木町四
電話青山二〇五六番
自宅 東京都中野區上町二八

佐麻澤和増増武乾橋平歸野星淺錦金細藤橋平齋木寺奧坂影藤中柳
 久田部田田田笠本井山島野田田川田本井藤村岡村本山牧川
 喜喜其金喜喜吉桔鞠軌世貴桔奇錦金三三山か三三あ淺淡愛有
 勇く角扇香城樂梗月外花昇梗聲松鳳清壽司榮生え幸玉を路路永明
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

倉田山花菊三龜伊小鈴村吉北野橫吉高岩西保後吉三山吉岩西吉
 田口田房地口田藤原木上田村口井田瀬田村坂藤坂並田良木村川
 司司壽紫秋松松松松松美三三な地末游有喜玉義義蟻義喜喜
 樂重瓢蝶月藤花鶴樂寶豆芳葵と由句操成史曲玉鳳昌昇若雀光照
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

大 同 米 仁德三江時沼富的井佐近白松魚池桑福平高高西中打
 阪 同 國 木永浦原田井岡野上藤江井岡崎田原安山品瀨内島矢
 氏西兼杉翠靜扇清靜盛生關聲清清里美美美瓢平一昭新晋
 家本廣山(地 松翠華昇史鶴昇路鳳司華華雄福尙峰登茶重靜平華水
 鶴西廣陶方之部) 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

北安同同濱同同清同同同同同靜八同川平同同同橫下同船大神
 京東 松 水 同 同 同 岡 縣 口 塚 同 同 同 濱 關 橋 垣 戸
 關岩佐宮飯榑西久石諏渡山森加古行傍國田小田鈴保安川吉岡
 崎藤川原貝保井訪邊本藤賀田島森島林中木良東奈岡田
 長山和は自安田素義勇梅壽大呂出鳴集榮吞香鈴倍部十
 門彦聲め樂樂湊保竹好正笑魁松彌波雲門樂玉笑雀鳳堂司公源
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

安中佐宮北佐西和中橋阿岡森櫻吉田關關荒高木水廣
 藤澤藤内島藤野田村本部野内井川中丸口木瀨村部
 ど平ぼ北巴巴春白梅蘆六呂浪祐與一一いづみは
 く之く北巴巴春白梅蘆六呂浪祐與一一いづみは
 ろ巴助ろ斗偶洲和猿月一鶴花光補厚子樂泉昇司
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

本金林神河松岸久栗緒堀外高國福葛大平安岡田小吉
 木子馬守本米原方山橋友水和熊野藤藤崎中川田
 大里林里痴千竹中千千と富東東都都都都都都都登
 熊松昇芳樂鳥史次鶴晴わ彌好光樂玉仙平昇竹洲十山盛
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

中水乃小島萩川井坂杉小野根小井田大須小八岩米黑高加飛青林岡
 野野村鹽原口上倉山柳田本林上用賀森木崎澤川橋藤石山本
 吳乃う子素素團高團二辰嘉津叶勝ん雅可な和和
 羽昇菊潮おぼ郎鳳遊橋鳳尾壽八巽壽津子昇駒昇樂叶遊兜め曉勢岡
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

福及大淺堂寶岡尾上中山中保田湯田松河原安鈴安上長篠岡山本石
 中川築井野藏崎崎田田崎島谷中淺中岡野田藤木部杉谷倉田下城川
 相蝶鐵天圓好語五向古紅廣光湖語國越光兒文文山彌彌冠華
 次旭葵花幹昇六玉好口陽平司笑玉月松聲巴樂雀登盛久門聲生之笑
 氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

後本
 援誌
 名譽
 會員
 (入會併號イロハ順)

當座帳

▽長谷川貫氏 奉天市大和區高千穂通
四番地南明莊二二七へ移轉。
▽志賀文久氏 青森より東上五十義會
に出演。
▽奈良大和氏 函館より東上五十義會
に出演。
▽田島集樂氏 横濱の同氏は目下長野
縣伊那町に出張中五十義會に出演の爲
め上京。
▽竹本東朝師 大森區調布嶺町二丁目
六八番地へ轉居。

文學首の研究

齋藤清二郎氏著「文學首の研究」は
原色版六、單色版一五六頁に丁寧な解
説が附された豪華な大寫眞帳ともいふ
べき未曾有の大著であります。缺本と
ならないうち直接著者へ御申込みをお
すゝめ致します。なほ便宜上弊社で取
次ぎも致します。 太 棹 社

前々號百四十六七合本口繪一頁目鶴

澤絃平師の二代野澤吉二郎襲名とある
は三代目の誤りにつき茲に訂正す。

太 棹 社

訃報

田中和國氏 本誌名譽會員田中和國
氏は病氣療養中の處十月九日午前六時
八分芝區田村町の事務所にて永眠。氏
は元代議士にて現在は第一法規出版株
式會社並びに大日本法令印刷株式會社
の社長たりしが、俳句は美穂と號して
錚々たる作家であつた。十月廿一日午
後二時より郷里長野市岡田町の自邸に
於て執行、享年六十一。

哀悼の意を示す 太 棹 社

定	一部金五十錢	郵税四錢
價	六月分金三圓	郵税共
	一年分金五圓	郵税共

▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なるべく振替に御送金の事
▼郵券代用一割増

昭和六年七月三日印刷納本
昭和六年七月五日發行
東京都小石川區音羽町一ノ二
編輯兼 富 取 壽 鹿
發行人

東京都小石川區指ヶ谷町四
印刷所 柏 葉 社
東京一三八三

東京都小石川區音羽町一ノ二
發行所 太 棹 社
振替東京三一七八五番

第百四十九號 (行發日五廿月毎)

序 文 谷崎潤一郎
齋藤清二郎著

文學首の研究

B列五號 原色版六葉
單色版五八頁 本文二〇〇頁
定價拾圓三拾錢 送料四十五錢
特製本拾五圓五拾錢 送料四十五錢

本書は人形淨瑠璃、特に文學の人形の首についての最初の研究書である。眞の文學の鑑賞は人形首に關する
智識なしには不可能であるが、著者は多年文學首の研究に没頭、未開拓の分野に對する完全なる研究に成功し
た。かかる研究はなかく一朝一夕に出来る仕事ではない。この書は將來首に關する底本になることは、絶對
に間違ひないところである。

加ふるに輯載せる圖版、原色版及び文學首分類表によつて、本書の價値を決定的のものにした。

特製本著者署名御希望の方は著者宛(振替大阪二八〇四三)御申込のこと。

東 京 ア ト リ エ 社 刊 行

食の味
愈増進

料理の味をよくする

チキンソンス



東 京 チ ン キ ソ ン 株 式 社 會

昭和十八年十月三日 印刷納本

行

毎月一
廿五日

(拾錢)